

**平成 29 年 1 月 21 日 (土)**  
**実践力養成型インターンシップ**  
**最終報告会開催報告書**

**徳島大学COCプラス推進本部事務局**

**平成 29 年 2 月 作成**

平成 29 年 1 月 21 日（土）、徳島大学地域連携プラザ 2F けやきホールにて、文部科学省 C O C + 事業「とくしま元気イノベーション人材育成プログラム 実践力養成型インターンシップ」の最終報告会を開催した。

## ▼報告会概要

### 1. 主旨・目的

現在、徳島大学 C O C プラス推進本部では、徳島県内大学生の県内就職率向上のため、学生が県内企業・地域と出会うきっかけ作りとして、“実践力養成型インターンシップ”を推進している。

昨年 6 月 2 日（木）に開催した「実践力養成型インターンシップフェア」では、受入れ候補企業・団体よりインターンシップ参加希望学生へのプレゼンテーションおよびマッチングを行い、7 つの企業・団体で 35 名の学生がインターンシップに取り組んだ。

本報告会では、インターン生が約半年間に渡って取り組んできたプロジェクトの成果と学び、また、インターンシップ受入先からのレビューを報告する。参加者同士でインターンを通して得られた気づきや学び等の教育的効果を共有すると共に、インターンシップ受入の知見の共有を図ることを目的として開催した。

### 2. 日時

平成 29 年 1 月 21 日（土）13：00～16：30

### 3. 場所

徳島大学常三島キャンパス 地域連携プラザ 2 階 けやきホール

### 4. 報告者（発表順）

受入れ企業・団体名	受入先	インターン生
株式会社 QLiP	情報責任者 江本大輔	元田遥/幡地智彦/北藤恵莉/ 井上拓磨/松田悠希
徳島大学地域創生センター 上勝学舎	客員教授 澤田俊明 上勝町地域おこし協力隊 阿部真哉 上勝町地域おこし協力隊 金子玲大	久保文乃/篠原諒子/清水杏咲/ 中谷篤人/表原宏樹
一般社団法人 徳島新聞社	生活文化部記者 橋本真味	片倉悠暉/大住歩/松田春菜/ 末菅悠人/西村香穂/高江真由子
株式会社あわわ	代表取締役社長 岩佐乃介 営業チームメディアプランナー 小山亜紀	小湊湧二郎/前川壘成/森岩晃平
NPO 法人マチトソラ	理事長 横山篤志 元木 香織	高畑優希/檜村千晶/野村雄飛/ 宮田英和
有限会社檉山農園	専務取締役 檉山直樹	藤井悠司/向井麻美/岡田佳奈/ 松本拓真/清水佑真/若木宏樹/ 久島春香/小林楓
大塚テクノ株式会社	人事総務部課長 千葉雄介	納多里奈/青山晃奈/谷和紀/ 吉川直弥

## 5. 最終報告会 参加者数

カテゴリ	人数
1 受入れ企業・団体（報告者）	10名
2 インターンシップ生（報告者）	30名
3 一般企業・行政関係者	37名
4 大学生	24名
5 他大学教職員	11名
6 一般	4名
7 徳島大学教職員	25名
合計	141名

## 6. 内容

プログラム	時間	担当者	内容・プロジェクト
開会	13:00 ～ 13:05	吉田 和文 (理事・副学長)	開会挨拶
事業説明	13:05 ～ 13:20	玉 真之介 (COCプラス推進本部推進監)	COC+事業について 実践力養成型インターンシップについて
プロジェクト報告①	13:20 ～ 13:40	(株)QLiP プロジェクトチーム	①プログラミング教育認知拡大のためのイベントの企画運営 ②海外のプログラミング教育を調査し授業カリキュラムを提案
プロジェクト報告②	13:40 ～ 14:00	(SC)上勝学舎 プロジェクトチーム	①新規棚田オーナー獲得のための営業ツールを作成 ②かやぶき民家の有効的な利活用法を提案
プロジェクト報告③	14:00 ～ 14:20	(社)徳島新聞社 プロジェクトチーム	①若者が新聞を手取るための仕組みを提案 ②徳島新聞ヤング面(ニチヤン)の企画/取材/執筆
(休憩)	14:20 ～ 14:35	-	-
プロジェクト報告④	14:35 ～ 14:55	(株)あわわ プロジェクトチーム	取材やイベントを通し 30 日間で 1000 人とつながる
プロジェクト報告⑤	14:55 ～ 15:15	(NPO)マチトソラ プロジェクトチーム	メイン事業「うだつマルシェ」のリピーター率と客単価を上げる 方策を提案
プロジェクト報告⑥	15:15 ～ 15:35	(有)檉山農園 プロジェクトチーム	経営理念を反映したHPのグランドデザインを提案
プロジェクト報告⑦	15:35 ～ 15:55	大塚テクノ(株) プロジェクトチーム	経営戦略に基づいた人材採用のための効果的なツールの 作成
講評	15:55 ～ 16:10	山中 英生 (COCプラス推進本部推進監)	各プロジェクト報告に対する講評
閉会	16:10 ～ 16:15	高石 善久 (理事・副学長)	閉会挨拶
アンケート記入	16:15 ～ 16:30	-	講評シート、コメントシートの記入

# 1. COC+事業説明

平成 27 年 11 月、文部科学省が募集した「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」に徳島大学を申請大学として提案していた「とくしま元気印イノベーション人材育成プログラム」が採択された。

## <COC+事業とは>

COC+事業は、大学が地方公共団体や企業等と協働して、学生にとって魅力ある就職先を創出・開拓するとともに、その地域が求める人材を養成するために必要な教育カリキュラムの改革を断行する大学の取組を支援することで、地方創生の中心となる「ひと」の地方への集積を目的とする。

## <とくしま元気印イノベーション人材育成プログラムとは>

人口減少、若年層人口の流出、厳しい財政状況などの徳島の課題に対し、徳島で特に雇用創出と就職率向上が期待される4分野（次世代技術関連分野、地域医療・福祉関連分野、6次産業化関連分野、地域づくり・観光・ICT関連分野）を中心に県内35機関が協働体を組織し取り組む。

取り組みとしては、徳島大学教育カリキュラム改革、協働事業、雇用創出に向けた事業の3本柱を掲げており、これらの取り組みを通し、4つの能力2つの確信（下記図参照）を身につけた人材を育成し、県内就職率の向上を目指す。

## <徳島大学教育カリキュラム改革—寺子屋式インターンシップ>

徳島大学教育カリキュラム改革の1つとして、寺子屋式インターンシップの開発を行う。寺子屋式インターンシップとは、企業側にはメンターを、大学側にはドン（学内メンター）を配置し、相互が密に連絡を取り合い、事前学習と事後の振り返りを強化した少人数制の実践型インターンシップをさす。



## 2. 実践力養成型インターンシップとは

本年度、徳島大学では、寺子屋式インターンシップの開発に向けたプロトタイプづくりとして、実践力養成型インターンシップを試行した。

### <実践力養成型インターンシップの種類>

実践力養成型インターンシップには、下記 5 つのスタイルが挙げられる。(図 1)

今回は、“業務補助型”、“課題協働型”、“事業参画型”の 3 スタイルにて、インターンシッププロジェクトの組成を行った。プロジェクトの組成においては、企業・団体側が学生を「お客様」としてではなく、共に課題解決に取り組む「期間限定の社員」として捉えた上で、**①企業・団体が抱える課題を解決するためのプロジェクトを組むこと、②企業・団体が描くビジョンを達成するために挑戦したいプロジェクトを組むこと**、を基軸としている。

また、このプロジェクトはインターンシップ受入企業・団体とCOCプラス推進本部が連携しながら、プロジェクト組成ならびにインターンシップ実施から終了後のフォロー、学生支援を行う。(図 2)

	特徴	学生の教育効果	企業のメリット
仕事理解型	1~2週間程度の職場・業務体験が中心。最後にレポートやプレゼンによる報告を実施することが多い。	自己の適性・志向の理解	企業・業界広報
採用直結型	実際に一緒に働いてみてお互いを見極める採用活動の一環。外資系企業や大手ベンチャー企業などで実施。	働くこと・業界の理解	採用マッチング
業務補助型	普通のアルバイトでは経験できないような企業の業務に取り組む。期間は1か月以上の長期が多い。	社会人基礎力	若者を活用した業務の推進
課題協働型	会社と大学を行ったり来たりして課題発見や企画立案に取り組む。グループワーク形式が多い。	社会人基礎力 + 学びの実践	若者の発想の活用・社内活性化など
事業参画型	企業の新規事業や変革プロジェクトの一員として業務に取り組む。期間は1か月から長いものと半年間の長期が多い。	社会人基礎力 + リーダーシップ	若者を活用した新規事業などの推進

図 1：実践力養成型インターンシップのスタイル

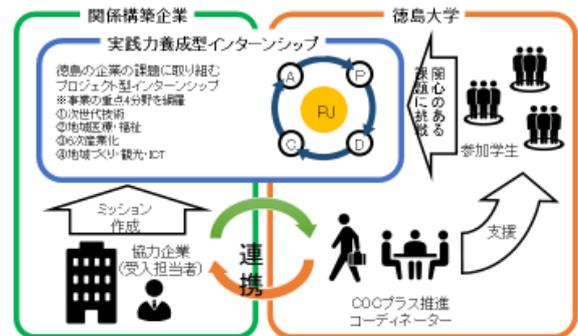


図 2：実践力養成型インターンシップのフロー

### <実践力養成型インターンシップの効果（企業側）>

- ① 学生、大学および社会に存在とCSR実施をアピールでき、企業イメージの向上につながる。
- ② 人材確保の面でも効果が期待できる。(採用直結型インターンシップ)
- ③ 大学との連携が深まり、産学連携の機会が生まれる。
- ④ 社員が学生に教えることで、日常業務を整理・体系化することができる。
- ⑤ 学生の斬新なアイデアが社員を刺激し、職場の活性化につながる。

### <実践力養成型インターンシップの効果（学生側）>

- ① 組織や仕事のやり方を学び、自己の適正や職業選択について考える契機が生まれる。
- ② 職場や社会のルールを知ることによって、就職後の適応能力を高めることができる。
- ③ 実際の現場に触れることで自分の欠けていることを自覚し、学習（大学生活）へのモチベーションが高まる。
- ④ 年齢の異なる人々と交流することによって、世代間コミュニケーションを学べる。

〈実践力養成型インターンシップの流れ〉



# 1. 開会挨拶

徳島大学理事（地域・産官学連携担当）・副学長の吉田和文理事より、開会の挨拶をいただきました。

吉田理事からは、徳島をはじめ日本の地方では、少子高齢化や東京への一極集中による人口減少が課題となっており、特に、大学等の高等教育機関を卒業した若者の就職時の県外への人口流出が問題（図 4）である点が語られました。

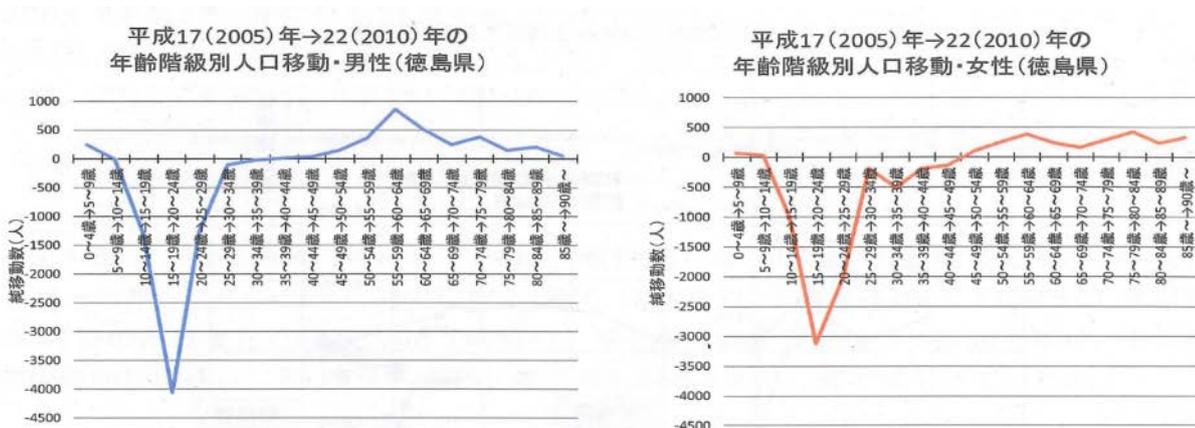
「学生の皆さんに県内企業への就職を考えてもらうには、県内企業に対する理解はもちろん、学生自身が自分の将来に対するビジョンや、徳島で働き暮らすメリットについての 2 つの確信を持つことが不可欠である」と吉田理事は言います。

これまで徳島大学で行ってきたインターンシップは、5 日間程度の短期間のものがほとんどであり、学生にとっては単なる職場見学、企業にとっても社会貢献やお付き合いの一環で終わってしまい、必ずしも十分な効果は得られませんでした。実践力養成型インターンシップは、学生が地域や地元の企業に出会い、2 つの確信を持っていただく機会とするべくスタートしました。

インターンシップの受入を施行して下さった企業・団体様に対しては、「来年度以降は『寺子屋式インターンシップ』として、大学の体制を整え、規模も拡大し、企業・学生双方の満足度を上げていくよう努めてまいります。インターンシップに際しましては学生へのご指導をください、また、お忙しい中、快く報告会にご参加いただいた企業のみなさまに心より感謝申し上げます。」と、感謝の意を述べさせていただきました。



■ 開会挨拶（吉田和文理事・副学長）



■ 図 4 徳島県の年齢階級別人口移動

## 2. 事業説明

徳島大学COCプラス推進本部推進監の玉真之介教授より、COC+事業の概要、ならびに、実践力養成型インターンシップについて説明をいただきました。

玉教授からは、「単に県内の就職率が上がればよいというわけではなく、地元就職したあと、徳島県の課題に向き合い、改善改革をしていくような人材に就職してもらい。そのための方策として、今回の実践力養成型インターンシップに取り組んでいる。」とお話を頂きました。

またインターンシップのスタイル（4ページ参照）や、スケジュール（5ページ参照）についてのご説明を頂きました。

インターン生に対しては、「今回のインターンシップには、参加したからといって単位になるわけでもない、1,2年生の参加もありました。彼らの取り組み発表を聞けるのを私自身とても楽しみにしています」とメッセージを送りました。



■COC+事業の主旨・概要を説明する玉先生

### 3. プロジェクト報告

各企業・団体ごとに、インターン生と受入担当者より、各社15分間の成果報告を行いました。

インターン生からは、主に下記4点について報告を行いました。

①ミッション

取り組んだミッションは何か。成果物として何を求められていたものは何か。

②参加目的

このプロジェクトに参加した目的、取り組む中で身につけたかったスキルや目標は何か。

③プロジェクトのプロセス

プロジェクトの流れを説明。

取り組む中で直面した壁に対してどのように乗り越えたのか。そこから得られた学びや気づきは何か。

④成果物

自分達が成し遂げた・作り上げた成果物は何か。

また、受入先さまからは、インターン生が入ったことによって社内や社員にどのような変化・効果があったのか、という点から、インターンシップを通してのレビューを頂きました。

発表順	企業名	ミッション
1	株式会社 QLIP	①世界のプログラミング教育を調査し、授業カリキュラムを考える ②プログラミング教育の認知拡大のためのイベントを企画運営する
2	徳島大学 地域創生センター 上勝学舎	①企業棚田オーナーを獲得するために効果的なツールを作成する (榎原地区) ②古民家の有効的活用のため地元住民の意向調査を行う(八重地地区)
3	一般社団法人 徳島新聞社	①若者に新聞を手にとってもらう仕掛けを考える ②徳島新聞の若者向けページ“ニチヤン”の企画、取材・原稿執筆を行う
4	株式会社あわわ	30日間で1000人とツナガル。その中で地域の課題を発見・解決する
5	NPO法人マチトソラ	うだつマルシェのリピーター率と客単価をUPさせるための提案を行う
6	有限会社榎山農園	経営理念を反映したHPのグランドデザインを行う
7	大塚テクノ株式会社	経営戦略に基づいた人材確保のためのツールを作成する

#### (1) 株式会社 QLIP

● **企業説明・事業概要**

新しい時代に活躍できる人材の育成を目指し、“ICT 教育”“心の教育”“論理的思考の育成”の3本を柱に教育事業を展開する株式会社 QLIP。

その一部門である「クリップ プログラミングスクール」では“ICT 教育”を中心に離職者向けの職業訓練（情報系訓練）などの社会人講座を始め、小中高校生を対象にしたプログラミング講座を実施。

今後社会において必須のスキルとなるプログラミングの普及・教育に努めている。

● **Long term internshipプロジェクト内容 ①**

プロジェクト名称	世界のプログラミング教育をリサーチせよ！
プロジェクト概要	海外のプログラミング教育の事例をリサーチし、それをもとにカリキュラムを作成。QLiPが行っている小中学生向けのプログラミング講座でそれを実践する。
プロジェクト組成の背景・目的	2016年4月19日、文部科学省が小学校でのプログラミング教育の必修化検討を発表した。しかし、プログラミング教育はまだ産声を上げたばかりで各教育機関いずれも「どのようにプログラミングを教えていくか」という大きな問題を抱えている。特に「小中高校で教えていない学習内容（座標・変数など）を前提としたプログラムを記述する場合、いかに効果的に伝えるか」という問題については多くのプログラミング指導員が頭を悩ませている。 この問題について、海外の教育事例を基に考察し、実際にQLiPが行っているクラスで実践することで解決の糸口を見つけることを目的とする。

● **活動スケジュール**

8月	世界のプログラミング教育の調査
9月	カリキュラムの作成/授業の準備
10月	授業の実施と反省/報告書の作成
11月	企業内報告会を実施

● **メンバー**

氏名	学部	学年	備考
北藤 恵莉	工学部	3年生	リーダー
井上 拓磨	工学部	2年生	
松田 悠希	理工学部	1年生	

● **取り組み内容**

海外のプログラミング教育における先進事例を調査し、インターン生 3 名がそれぞれに授業カリキュラムを考案した。各自 2 回ずつ子供たちに授業を実施し、修正と改善を加えたカリキュラムを受け入れ先に提案した。

<作成カリキュラム>

- ①「Code Monkey 攻略を通した実践的なプログラミングへの挑戦」 (インターン生：松田)
- ②「HTML を使った HP 制作」 (インターン生：北藤)
- ③「Unity を使ったゲーム制作」 (インターン生：井上)

カリキュラム					
● 内容: ゲーム制作ソフトを用いた本格的なゲーム作成の初歩を学ぶ					
番号	内容	番号	内容	番号	内容
1	紹介と操作説明	9	モーションの作成	17	障害物ゲームの作成2
2	物理演算	10	敵の作成	18	爆破ゲームの作成
3	重力を使ったゲーム	11	迷路ゲームの作成	19	爆破ゲームの作成2
4	キャラクターの設置	12	迷路ゲームの作成2	20	AI対戦ゲームの作成
5	キャラクターの設置2	13	他の人のゲームをプレイ	21	AI対戦ゲームの作成2
6	簡単なミニゲーム	14	じゃんけんゲームの作成	22	オリジナルゲームの作成
7	C#入門	15	じゃんけんゲームの作成2	23	オリジナルゲームの作成2
8	C#入門2	16	障害物ゲームの作成	24	仕上げと発表

■ インターン生考案の授業カリキュラム (Unity)



■ 考えた授業を子供達に行っている様子

● インターン生コメント

- ・ メンバー全員が自分のことで手一杯で他メンバーの活動まで考えられておらず、チームプレーができなかったという反省点が挙げられる。もっと情報共有をこまめに行ったり、お互いに意見を出し合うなどできていれば改善されていたのではないかなと思う。
- ・ 事例調査とカリキュラム考案を別々の作業として捉えており、先進事例の調査結果を授業内容に十分に活かせなかった。それぞれの作業の「目的」を頭に置いておけばこのようなことにならなかつただろうと思う。
- ・ 実際の仕事を行うことで自分の将来像を具体的にイメージすることができた。
- ・ 最後まで全力でやりとげるといふことの重要性を学ぶことができた。

## (1) -2 株式会社 QLIP

## ● Long term internshipプロジェクト内容 ②

プロジェクト名称	こどもに発信！プログラミングは面白い
プロジェクト概要	近隣の小中学校にプログラミングについてのアンケートを実施し、そこから「ゲームは好きだがプログラミング（自分から作り上げること）に興味のない」学生のニーズを推測する。この学生がプログラミングに興味を持てるようなイベントを企画し実践することでさらなる普及拡大のヒントを見出す。
プロジェクト組成の背景・目的	<p>現在、小学生から高校生までを対象にプログラミング教育の啓蒙も含めた普及活動を行っているが、そこで気が付いたのが以下の点である。</p> <p>「ほとんどの学生がゲームに興味があるにも関わらず、そこから『プログラミングを勉強したい』『自分でゲームを作ってみたい』と考える学生は少ない」</p> <p>これは単にプログラミングの存在に気付いてないだけなのか、それとも主体性の問題なのか。この点が明確になれば今後我々の事業を展開していくうえで、ターゲットの絞り込みなどの大きな力になると考えている。</p> <p>またこれは、学生の主体性の問題（受動的で自ら行動を起こさないなど）についてプログラミング教育という観点から新たな視点を与えるものとも考えている。</p>

## ● 活動スケジュール

8月	QLIP 主催のプログラミングイベントに講師補佐として参加
9月	小中学校に行うアンケートの作成/アンケートのアポ取りと実施
10月	イベント内容の検討/イベント告知/イベント準備
11月	イベント実施/企業内報告会

## ● メンバー

氏名	学部	学年	備考
元田 遥	工学部	4年生	リーダー
幡地 智彦	工学部	3年生	

## ● 取り組み内容

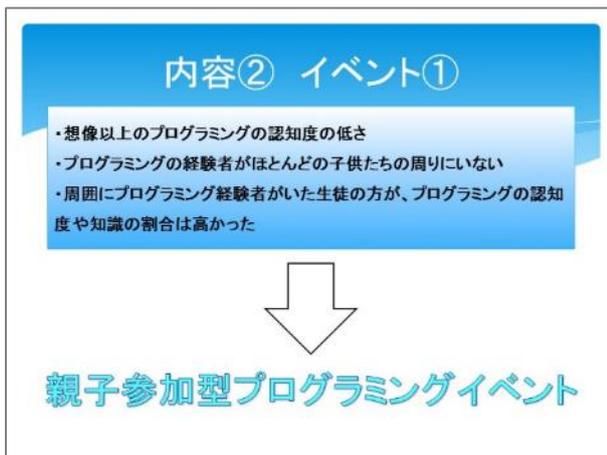
近隣の小中学校にアポイントを取り、プログラミングの認知度に関するアンケート調査を実施した。その結果から「親子参加型」のプログラミングイベントを企画・運営した。

＜インターン生が企画した5つの体験ブース＞

- ① Scratch「スクラッチを使ってゲームをつくってみよう！」
- ② Android「アプリ開発や本格的なプログラミングに挑戦しよう！」
- ③ Kinect「センサーを使って自分の骨格を覗いてみよう！」
- ④ Robocup「プログラミングでロボットを動かしてみよう！」
- ⑤ Unity「本格的なゲーム作成にチャレンジ！」
- ⑥ Arduino「マイコンをプログラミングでLチカ!？」

イベント後のアンケートでは、参加した保護者の100%が「子供がプログラミングを学ぶことは良い事だと思う」と回答し、参加した子供の100%が「今日のイベントに来て良かった」「またプログラミングをしてみたい」との回答を得られた。

また、子供・保護者双方から、大学生が講師（メンター）として参加することに対し、高い評価を得られた。親子参加型という新しい形のイベントスタイルを提案できたと共に、大学生がメンターとしてイベントに関わることによる効果を実証できた。



■ アンケート結果からイベントコンセプトを決定



■ イベント当日の様子

## ● インターン生コメント

- ・ 授業やアルバイトとの兼ね合いで時間が取れなかったことから、時間が遅延してしまうことがあった。
- ・ 大学での専攻分野（教育工学）との関係や、プログラミングを実際の仕事として活かしていきたいの思いからこのインターンに参加したが、実際に働いてみると思ったよりも事務作業が多かった。仕事は自分の興味があることばかりではないということを知り、やりたいことだけでなく、やらなければならないこともきちんと納得してやっていけるようにならないといけないと感じた。

## ● 最終報告会の様子



■プロジェクト報告の様子の様子



(株)QLiPプロジェクト報告



■受入担当 江本氏

### 受け入れ担当者レビュー

- インターンシップを受け入れるに当たって、本来の業務ではないインターンシップに時間をとられて、本業の方がおろそかになってしまうのではないか、という懸念があった。
- 対策として、①目的を明確にして決して変更しないこと。②納期を設定すること。この2点を事前にしっかりと決めておいた。本来の業務ではないという意識から、優先順位が下がり、後へ後へと時期をずらして、結果的にコストが膨大になってしまう、というリスクを回避するためのものであった。

#### <インターンシップへの期待①>

- 子供達にとって歳の近い大学生は良いメンターと成りうるのではないかと期待していた。
- ⇒期待以上の効果。子供はもちろん、保護者からも大学生講師の評判は高かった。

#### <インターンシップへの期待②>

- 学生ならではの観点で面白いイベントや授業ができるのではないかと期待していた。
- ⇒期待以上にはならなかった。ガントチャートでタスクをガチガチに縛ってしまったが故に、学生の自由度を奪ってしまったのではないかと反省もある。

#### <インターンシップへの期待③>

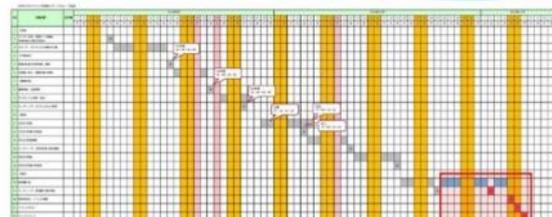
- 社内の新人教育体制を確立させたい。
- ⇒点数をつけるなら50点。新人の教育に関してどのようなフォローが必要かは洗い出せたものの、仕事に対するモチベーションややる気の低下が起きたときのフォローアップの仕方といったところまでは踏み込めなかったのが残念であった。
- インターンシップを通しての目的として、一人でも多くの子供たちにプログラミングに触れてほしい、ということ掲げていました。インターン生の満足度、企業の達成度で言えば100%とは言えないものの、この1番の目的に対しては達成できたと自負している。

### インターン参加の目的

1. 子どもたちにとって年齢の近い大学生というのは、より親密なメンターとして機能するのでは
2. 学生ならではの観点から、面白いイベント内容や授業コンテンツが生まれるかも
3. インターンシップを通して、新人の教育体制を整えていきたい

■江本氏がインターン受入を決めた理由

### 対策



■江本氏が作成したガントチャート

## (2) 徳島大学地域創生センター 上勝学舎 (サテライトキャンパス)

### ● 企業説明・事業概要

徳島大学地域創生センター上勝学舎は、中山間ビジネスを創出するための人材養成拠点であり、徳島大学と上勝町との包括協定に基づいて行う事業である。

ビジネス力、地域戦略力、協働・連携力、人間力、ICT 力や上勝町での活動知見に着目した「地域再生人材創出講座の開設」、上勝町取り組みの成功要因や苦労等の活動知見を検証する「上勝学研究」、上勝町資源を活用した「地域ビジネス創出」の、3つの事業を行う。

### ● Long term internship プロジェクト内容 ①

プロジェクト名称	榎原地区【新規棚田オーナー獲得のための営業ツールを作成せよ！】
プロジェクト概要	棚田の持ち主（地元住民）および棚田オーナー、オーナー制の運営主体である NPO 法人にヒアリングを行い、棚田紹介パンフレットを作成する。
プロジェクト組成の背景・目的	<p>榎原の棚田は平成 11 年に「日本の棚田百選」に認定され、平成 22 年には「国の重要文化的景観」に認定された。江戸時代の風景がそのまま現代に残る貴重な文化的資源であるが、過疎と高齢化が進行するこの町では棚田の維持・管理が困難になってきている。そこで地元住民の活動がきっかけとなり始まったのが、「棚田オーナー制」である。</p> <p>棚田オーナー制とは、主に都市住民から会費を徴収してオーナーになってもらい、一定区画の水田を割り当て、田植え体験や稲刈り体験をしてもらい、収穫物を持ち帰ってもらう仕組みである。</p> <p>榎原での棚田オーナー制は今年で 11 年目を迎えるが、まだまだオーナーの数が足りず、耕作放棄された棚田が多く余っている。そのため、今回のインターンでは新規棚田オーナーを獲得するための営業ツールを作成してほしい。</p>

### ● 活動スケジュール

8 月	第 1 回現地調査（本格的な調査の前に現地を事前視察）
9 月	第 2 回現地調査（地元住民へのヒアリング）
10 月	第 3 回/第 4 回現地調査（地元住民へのヒアリング）
11 月	第 5 回現地調査/仲間づくり講習会の実施
12 月	第 6 回現地調査（八重地地区全住民一斉ヒアリング調査）
1 月～3 月	ヒアリング調査のまとめ・報告書作成/地元住民を交えた座談会の開催/成果物提出

### ● メンバー

氏名	学部	学年	備考
久保 文乃	工学部	3 年生	リーダー
篠原 諒子	総合科学部	3 年生	補佐
中谷 篤人	総合科学部	1 年生	
表原 宏樹	総合科学部	2 年生	
清水 杏咲	総合科学部	2 年生	

## ● 取り組み内容

新規棚田オーナー獲得のためのパンフレットづくりのため、棚田オーナー制や文化的景観について複数回にわたり地元住民へのヒアリングを行った。その結果、「先祖代々から受け継いできた棚田の美しい景観を守っていききたい、けれど、棚田は自分達にとっては生活の場であり、自分達の暮らしが成り立つかどうかの方が大事である」との声が聞こえてきた。文化的景観に指定されたことを誇りに思いつつも、指定されたことによる様々な制約が地元住民の生活を圧迫しているという事実にも直面した。受入先と相談の結果、インターンの目的を、地元住民と運営主体である NPO 法人を交えて「オーナー制の“これまで”と“これから”」を話し合う座談会を開催することに変更した。座談会で使用する資料として、地元住民からのヒアリング内容と新規オーナー獲得のための提案をまとめた報告書、ならびに棚田紹介パンフレットを作成した。

座談会を 2 月 19 日に開催し、報告書とパンフレット案を受入先に提出した。



■ 上勝学舎での打合せの様子



■ 上勝町榎原地区 現地視察の様子

## ● Long term internship プロジェクト内容 ②

プロジェクト名称	八重地地区【かやぶき民家の利活用を考える！】
プロジェクト概要	八重地集落に住む住民へのヒアリング調査などを通して、集落にあるかやぶき民家の有効的な活用方法を提案する。
プロジェクト組成の背景・目的	八重地集落は過疎と高齢化が進む地域であり、集落には数年前に上勝学舎が地元の人々の協力を得て改装した古民家がある。 地元住民同士や外の人との交流の場として、また、地元の人が生活していくための資金を得るためのツールとして、古民家を有効的に活用したい。 様々な活用方法が考えられるが、地元住民のニーズに沿った形での活用を検討している。 地元住民へのヒアリングを通して、かやぶき民家の有効的な活用法についての提案をしてほしい。

## ● 活動スケジュール

8 月	第 1 回現地調査（本格的な調査の前に現地を事前視察）
9 月	第 2 回現地調査（地元住民へのヒアリング）
10 月	第 3 回/第 4 回現地調査（地元住民へのヒアリング）
11 月	第 5 回現地調査/仲間づくり講習会の実施
12 月	第 6 回現地調査（八重地地区全住民一斉ヒアリング調査）
1 月～3 月	ヒアリング調査のまとめ/成果物提出

● **取り組み内容**

かやぶき民家の有効的な活用方法を探るため、地元住民へのヒアリング調査を複数回にわたり行った。その結果、八重地という1つの集落の中にも地縁別・目的別・属性別などの様々なレイヤー別に小さなコミュニティが形成されていることに気づいた。この時点までは「集落全体の課題を解決しよう、そのために古民家はどうか」という視点で考えていたが、まずは「八重地の複雑なコミュニティと多様なニーズを1つ1つ把握する必要がある」との視点に至った。

受入先担当者と相談の結果、インターンの目的を、全住民にヒアリング調査を行い、地元住民の交友関係（コミュニティ）と1人1人の困り事を拾い上げ、地域課題の解決・古民家の活用に向けた基礎調査とすることに変更した。

限られた時間の中で全住民へのヒアリングを完遂させるため、サークルの部会でプレゼンをするなどして9名の調査協力者を集めた。協力者に対しては、上勝町に関する基礎知識やヒアリングのノウハウを教える講習会をインターン生が企画して実施した。12月の現地調査においては、協力者とインターン生らが協力して全住民ヒアリングを行い、困り事や交友関係をエクセル相関図としてまとめた。



■ 八重地集落にあるかやぶき民家



■ 八重地集落 ヒアリング調査



■ 調査協力者向けのヒアリング事前講習会の様子

できた成果物

世帯名	氏名	年齢	性別	住人暮らし	出身地	現在	自治会行事			古民家
							八幡	名経堂	出役	
久保	在	○								○
清水	在	○								○
中谷	在	○								○
奥原	在	○								○
阿部	不在(上勝)	○								○
金子	不在(上勝)	○								○
川崎	在	○								○
宮本	在	○								○
高橋	在	○								○

■ 成果物：人物相関エクセル（一部抜粋）

● **インターン生コメント**

- ・地域に入るということを実際の現場で体験できたのは大きな学びであったと同時に、個人のスキルの未熟さを痛感した。
- ・地域で働くという選択肢が今までなかったが、そういう選択肢もあるんだということが分かり、職業選択の幅が広がった。
- ・ミーティングの中で、インターン生がお互いに助けられたことや備えることよきを意見し合う機会があった。半年間という長期間、引くに引けない現場でチームで取り組んできたからこそ見えてきたそれぞれの個性があった。他者から客観的に見た「自分」を教えてもらうことで、今まで向き合うことのなかった「自分」というもの向き合う機会となった。

## ● 最終報告会の様子



■プロジェクト報告の様子の様子



(SC)上勝学舎プロジェクト報告



■上勝学舎 八重地地区受入担当  
阿部氏

### 受け入れ担当者レビュー

- インターンシップ受入にあたり、インターン生を「学生」ではなく、上勝学舎の「社員」として扱ってほしいということを知っていた。
- 自分自身、地域おこし協力隊として社会に出たばかりで、上司としての自覚やスキルが備わっていない状況であった。
- 何度も事業の目的を見失うこともあり、学生にも不安な想いをさせてしまったことと思う。しかし、そんな中でも学生たちが頑張ってくれて、自分1人では集められないような、自分には話してくれないような地元集落の人たちの声を集めることができたのはよかったと思う。
- 人の上に立つ事の難しさも知り、その分、自分自身も成長できたと思う。



■上勝学舎 受入担当 澤田氏

### 受け入れ担当者レビュー

- 今回のインターンシップでは、本当に様々な視点からの多様な意見が出てきた。意見が多様化するがゆえに、インターンの目的が最初とどんどん変わっていきってしまう、ということもあった。
- 似たようなことは、学舎がテーマの1つとしている『持続可能な集落再生』を行っていく中でも出てくる。多様な立場・考え方の人間が共同で集落再生に取り組む際に直面する問題に今回のインターン生たちはぶちあたった。
- 地域に入って活動をしていきたいと言う学生たちにとっても大きな成長になったのではないかなと思う。

(3) 一般社団法人 徳島新聞社

● 企業説明・事業概要

日刊新聞の発行ならびに新聞発行付随事業の実施。また、生涯学習を中心としたカルチャーセンターの運営。

徳島新聞社では朝刊、夕刊を発行し、地元ニュースから世界各地のニュースまで新鮮情報を幅広く届けている。

県内外に取材拠点（支局）を多数設置し、多くのスタッフの力と情報の集結により新聞がつくられている。これからも徳島新聞社は県民の皆様の暮らしに役立つ情報をお届けする。

● Long term internship プロジェクト内容

プロジェクト名称	Wants から始める新聞作り
プロジェクト概要	<p>①若者に新聞を手にとってもらうための仕掛けを考える</p> <p>②徳島新聞の若者向けページ「ニチヤン」の企画・取材・執筆を行う。</p> <p>まずは、学生が手にする新聞作りから始める。そのためには、彼らの「Wants」を知りたい。自分と仲間とが興味を持つニュースであり、それが手元に置いておきたい情報ならば、自然とそれは広がっていく筈だ。学生の Wants とは何か、そしてそれほどのように拡散していくか、或いは拡散させていくべきなのかを考え、検証を進める。</p> <p>10代・20代の読者向け紙面として週一度掲載しているニチヤンを、「学生が手にする新聞紙面」として作り上げてもらいたい。計2回にわたり担当してもらうが、1回目の基本テーマは新聞社が用意する。2回目は学生でテーマを設定してもらう。どのように仕上げるかは、原則、学生自身で考えてもらいたい。同年代の人気コーナーとして仕上げてもらえることを期待している。</p>
プロジェクト組成の背景・目的	<p>「新聞は読まないが、新聞社発信の情報は信用して読んでいる。」この類の言葉を繰り返し学生さんから聞いている。額面通りに受け取るならば、新聞記者が書いたニュースは信頼性が高く、読む価値のある情報だと考える学生は多いようだ。</p> <p>それならば、学生の Wants とその情報拡散方法を検証し、欲しい情報を深掘りして、彼らが読み応えを感じる情報作りに努めれば、求める新聞に近づくのではないか。</p>

● 活動スケジュール

9月	1回目ニチヤン記事テーマ「サーフィン」執筆に向けた打合せと取材
10月	1回目ニチヤン記事テーマ「サーフィン」取材に基づき記事の執筆（10月30日掲載）
11月	2回目ニチヤン記事テーマ「夢・進路」テーマ策定のための打合せ・取材・執筆
12月	2回目ニチヤン記事テーマ「夢・進路」取材に基づき執筆（12月11日掲載）
1月	最終報告会にむけた準備
2～3月	徳島市内の高校生1300人にアンケートを実施/若者が手に取る新聞についての提案を行う

● メンバー

氏名	学部	学年	備考
片倉悠暉	工学部	3年生	リーダー
大住歩	総合科学部	3年生	補佐
松田春菜	総合科学部	3年生	
未菅悠人	総合科学部	3年生	
西村香穂	総合科学部	3年生	
高江真由子	総合科学部	1年生	

## ● 取り組み内容・成果物に関して



徳島新聞社のプロジェクトには、インターン生6名が取り組んだ。

若者に手にとってもらうための要素として、① 共感性があること、② タテ（教師や親）でもヨコ（友達）でもないナナメの関係（自分の一歩先を行くロールモデルとなる人）があること、③ 読者と取材相手がつながる紙面であること、④ インターネットのように双方向性があること、の4つを挙げた。（左図）



■ インターン生執筆記事（抜粋）  
1回目テーマ「サーフィン」



■ インターン生執筆記事（抜粋）  
2回目テーマ「夢・進路」

これら4要素を記事に盛り込みながら、若者向けページ「ニチヤン」の執筆を2回にわたって実施した。

1回目の徳島新聞社から与えられた「サーフィン」というテーマでは、「共感性」と「ナナメの関係」を盛り込んだ記事を執筆し、2回目は学生自ら設定した「夢・進路」というテーマで執筆した。

「夢・進路」という若者誰もが通る道にテーマを設定したことで「共感性」を、現役大学生や若手社会人を取材相手として取り上げることで「ナナメの関係」を盛り込むなど、4要素を盛り込む工夫を行い執筆した。

また、徳島市内の高校に通う高校生、約1300人に対して「新聞に対する意識ならびに高校生の嗜好」を調査するアンケートを実施し、①新聞と若者の新密度の実態、②アナログ（紙媒体）とデジタル（webなど）での情報に求める価値の違い、③これからの新聞が果たすべき役割についての提案をまとめた報告書を作成した。

## ● インターン生コメント

- メンバー間での情報共有不足がモチベーションを低下させる要因になっていた。自分達は情報共有の本質を理解していなかった。伝える側は「決まったことを伝えればそれでいいだろう」とLINEの文面だけで終わらせていたし、聞く側も読むだけで終わらせていた。伝える側は相手の理解度を確認しながら話をするべきだし、聞く側も相手の言葉をかみくだき疑問点を確認しながら聞くべきであった。
- メンバーがミーティングに来なくなるという問題が起こった時、自分達はそのメンバーへの怒りや、「なぜそんなことをしたのか」ということを考えるのにエネルギーを割いてしまった。これは、徳島新聞社様から「期間限定の契約社員」として扱われていることの認識が不足しており、学生気分であったことが招いたのだと思う。社員であれば、問題があっても職務の遂行を第一に考え行動するだろう。メンバーが欠けたら、まずは残りのメンバー全員でそれをカバーし、成果を残すことにエネルギーを割くべきだった。

## ● 最終報告会の様子



■プロジェクト報告の様子 (一社)徳島新聞社プロジェクト報告



■徳島新聞社 受入担当 橋本氏

### 受け入れ担当者レビュー

#### <良かった点>

- ・読者に近い年齢層の記者＝若者のニーズを反映した紙面ができたこと。
- ・夢をテーマにした2回目の新聞記事は社内での評価も高かった。
- ・自分の担当している紙面は毎回同じチーム・同じ人間でやるわけではないので、都度メンバーは変わる。インターンということを利用して、今まで組んだことのないような人に声をかけて、チームを組んでみたり、新しいことを始めてみたりできたのは社内にとっても良い効果だった。

#### <悪かった点>

- ・インターンシップの期間が、もともと長期であったのが、様々な要因もあり、かなり長期になってしまった。そんな中で、授業・アルバイト・部活動などの他の活動とのスケジュール調整が難しかったり、インターンシップの優先順位が下がることもあった。
- ・モチベーションが低下しているなと感じたときのフォローの仕方に課題を残した。

## (4) 株式会社あわわ

### ● 企業概要

- ①月刊誌制作出版、別冊制作出版等の【タウンコンテンツ事業】を展開。  
 主な出版物：『あわわfree』（徳島のあらゆる情報を詰め込んだバラエティー豊かでお徳感満載のフリーマガジン）  
 『Geen』（徳島のグルメ情報を中心に大人の「知りたい！」を叶える“まだ見ぬ徳島と出会う”一冊）
- ②タウン誌制作で培ってきたノウハウを活かし、企業が抱える課題に対し様々なツールを企画・制作・運営する【S P 事業】を展開。  
 主な制作物：パンフレット制作/webサイト企画/プロモーションや集客型イベント等のイベント運営
- ③徳島の建築家を無料で紹介するサービス【建てようネット事業】を展開。

### ● Long term internship プロジェクト内容

プロジェクト名称	あわわ★繋がるプロジェクト
プロジェクト概要	『あわわ』の様々な業務を通じて街と繋がることを体感してもらう。 新店や特集記事の取材、街頭アンケートやインタビューを通じて、30日間で1000人とつながることを数字目標として取り組んでもらう。 つながる中でインターン生自身で地域の課題を見つけ、解決するための企画立案を行う。
プロジェクト組成の 背景・目的	あわわの仕事は、街、そして街をつくっている様々な人とつながることで初めて価値が生まれる。ただ情報を収集・発信するだけではなく、その情報を持っている人とつながることで、より深く地域の課題を知り、解決のアイデア発見に近づくことができる。 インターン生の皆さんには、「あわわ」の社員として、徳島のいろいろな人とつながりを作り、徳島の課題を見つけ解決に向けて動いてほしい。

### ● 活動スケジュール

8月～11月	あわわの業務に携わりながら1000人とつながる中で地域の課題を見つける
12月	課題を解決するための企画を立案する
1月	企画したイベント「おやこん」の広報・集客、運営を行う

### ● メンバー

氏名	学部	学年	備考
小湊湧二郎	総合科学部	3年生	リーダー
森岩晃平	工学部	3年生	
前川壺成	工学部	2年生	

## ● 取り組み内容

1000人とつながることを数値目標に取り組みを開始した。店頭での読者調査、街頭アンケート、取材同行などを行い、8月から12月までで810人の人と繋がった。

徳島の人とつながる中から、「徳島県民は地元への愛着が強くイベントも多数開催されているが、若者（特に大学生）が地域に出ていない」という徳島の課題を発見。大学生が街に出るようになれば徳島は元気になるのでは、と考え大学生対象のイベントを企画した。

### 出会ってきた人たちから得た徳島の魅力・課題

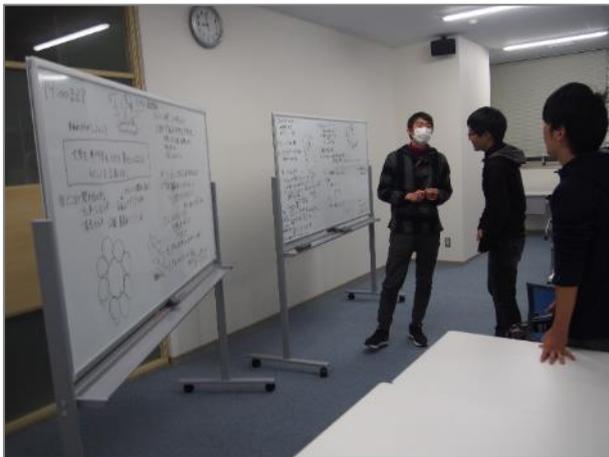
- ・ 徳島人は徳島が好き、地元のイベントにも積極的に参加している。
  - ・ 一方で自分の周囲の大学生はあまり外に出ていない。ギャップを感じる。
- 若い世代、特に大学生が外に出るようになれば徳島は元気になるのでは？

■ 1000人とツナガル中で見えてきた徳島

## ＜インターン生企画イベント「おやこん」＞

『お酒がなくても楽しめるおやつコンパ』がコンセプトのこの企画。初対面の人と話すのが苦手な人、合コンに参加する勇気がない人などでも参加しやすいようにと考えられた。総勢50名近くの大学生が参加した。

参加者へのヒアリングやアンケートの結果から、『徳島の若者は遊びたくないわけではなく、きっかけを探している』ということが分かり、大学生と街をマッチングさせる機会の創出ができれば徳島をもっと元気にできるのでは、と提案した。



■ イベントの企画MTを行うインターン生たち



■ インターン生企画イベント「おやこん」の様子

## ● インターン生コメント

- ・ あわわで働く社員の姿勢を間近で見ることで、仕事に対するモチベーションの保ち方を考える機会になった。
- ・ 自分のモチベーションの上がり下がり、何のためにその仕事をするのか」という仕事の意義を常に持っているかどうかであるということが分かった。
- ・ 「おやこん」はほぼ自分達に企画運営を任せてもらった。インターン生にここまで任せてくれる、やりたいと言ったことにチャレンジさせてくれたあわわ様に感謝。

■ インターン生企画「おやこん」イベントのチラシ

## ● 最終報告会の様子



■プロジェクト報告の様子 (株)あわわプロジェクト報告



■あわわ 受入担当 小山氏

### 受け入れ担当者レビュー

- 受入担当だけでなく、社員全員がインターン生のことを後輩だと思って取り組めたことがよかった。若手社員のモチベーションが上がったということが、社内に対する1番の成果だと思う。



■あわわ 岩佐社長

### 受け入れ担当者レビュー

- 受入側としてインターン生のサポートが不十分だった。
- 夏休み期間中はインターン生がそろって入社することができたが、授業が始まると予定をあわせるのが難しく、バラバラで活動することが多くなった。受入側として、そのあたりも予見してスケジュールを組んでいけばよかった。
- 現場の色々な仕事をやってもらったが故に、優先順位のつけ方で学生は混乱してしまった。自分達にとっては経験則で分かるものでも、学生にとってはそうではなく、まずはそこを丁寧に教えていけば、というのが反省点としてある。
- <気づき>
- 1つの成果として、「おやこん」という彼らが自ら考えた企画を広報・集客して運営まで成功させた、というのがある。ほぼインターン生だけで行った企画。
- 初めは積極性が足りないと思っていたインターン生だが、『任せる』ことで自発的に動くようになり、積極性も生まれたというのが、受け入れ側の企業としても勉強になった。
- 我々では思いつかないような、学生目線の新しいアプローチに刺激を受けた。

## (5) NPO 法人マチトソラ

### ● 団体概要

徳島県三好市において、地域活性化の事業を行っている。
事業内容① 観光・地域の発展のためのイベント事業
② 空き家を活用したコミュニティ・スペース創造事業
③ 都市からの移住促進に関する事業
④ 地域経済の活性化による雇用促進支援事業
⑤ 地域文化の情報収集、発信に関する事業
⑥ 人づくりを通じた地域活性化に関する事業

### ● Long term internshipプロジェクト内容

プロジェクト名称	調査！うだつマルシェ
プロジェクト概要	NPO 法人マチトソラのメイン事業である「うだつマルシェ」の実態を調査し、客単価とリピーター率向上のための提案を行う。 ・うだつマルシェの現地事前調査（7月上旬） ・うだつマルシェ当日・会場にてアンケート調査を実施（7月30日） ・報告と提案（9月下旬）
プロジェクト組成の背景・目的	地域活性化、地方の魅力発掘をコンセプトに行ってきた「うだつマルシェ」が今回、第16回を迎える。うだつマルシェは、年二回行われることで安定しており、夏のマルシェは阿波池田青年会議所の「JC わくわくフェスタ」と、冬のマルシェは「四国酒まつり」と同時開催をしており、他団体との協調を行っている。 出店者の応募を行って業種の選定を行い、毎回来られる方を飽きさせない、簡易アンケートを取って声を聞き次回へ反映する、などの課題の発見と改善を行っているが、運営側が見過ごしている部分もあると考える。また当初の立ち上げ期と比較して人口動態も街の様相も少なからず変化してきており、今後の地域の活性化、人口の定着などを図る上で適切なイベントへと形を変えることが必要となってきた。 そこで今回のインターンシップでは、うだつマルシェを今後も長く続くよりよいイベントとしていくための提案を行ってほしい。

### ● 活動スケジュール

7月	現地事前調査/アンケート作成/うだつマルシェにてアンケート実施（7月30日）
8月	アンケート集計/課題の考察/提案書の草案作成/アンケート結果のグラフ化
9月	受入先での成果報告会
10月	撮影した成果報告会の動画を編集
11月	編集した動画を YouTube にUP

### ● メンバー

氏名	学部	学年	備考
高畑優希	総合科学部	3年生	リーダー
檜村千晶	総合科学部	3年生	補佐
宮田英知	総合科学部	3年生	
野村雄飛	総合科学部	4年生	

● **取り組み内容**

客単価とリピーター率向上のための提案を行うため、①うだつマルシェの主催者、②うだつマルシェへの出展者、③来場者（一般客）、の3者に対してアンケート調査を実施した。リピーター率向上のためのサービス拡充案、ならびにそれらのサービスを実施する上での、運営体制の整備などを提案として挙げた。

また、受入先での成果報告会の様子を撮影し、編集してweb上の動画サイトに投稿することで報告会に参加できなかった方々にも閲覧してもらえるよう工夫を行った。



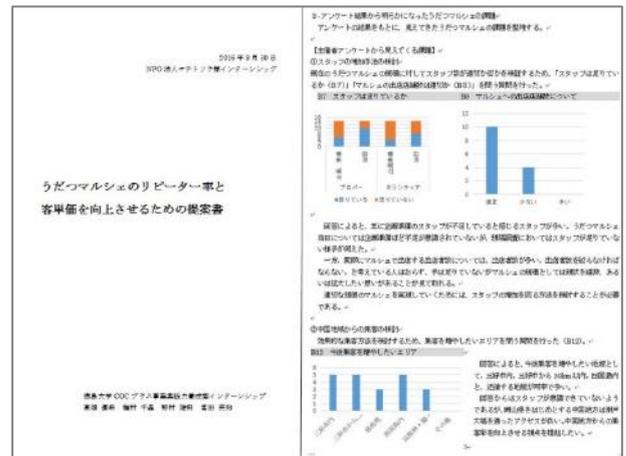
■ アンケート作成のための打合せ中の様子



■ うだつマルシェ当日 出展者アンケートの様子



■ うだつマルシェ当日 来場者アンケートの様子

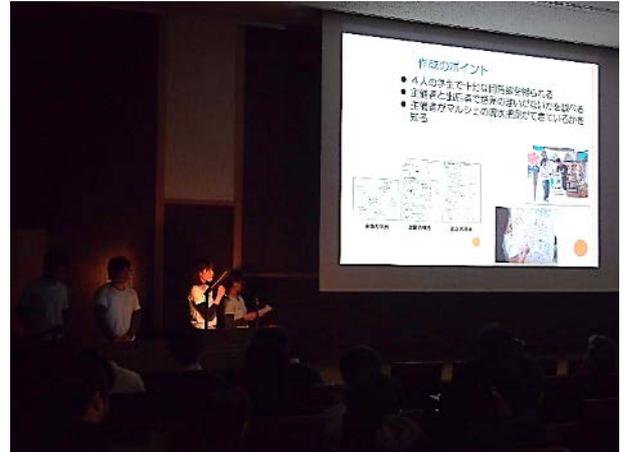


■ 提出した報告書（一部抜粋）

● **インターン生コメント**

- ・ 街づくりを行うための経験値やマーケティングの手法を学ぶことができた。
- ・ それ以上に、今後仕事をしていく中で、チームとしてプロジェクトを達成するためにはどんなことが必要か、というのが実体験を伴ってわかったことが最も大きな学びである。スケジュール管理の甘さや情報共有不足によるチームワークの乱れ、話し合いを進めるに連れて最初の目的は何だったかを見失ったことによる提案（成果物）のズレなど、今回の反省は大きく活きると思う。チームで何かを成し遂げることの難しさを学んだ。

## ● 最終報告会の様子



■プロジェクト報告の様子 (NPO)マチトソラプロジェクト報告



■マチトソラ 受入担当 横山氏

### 受け入れ担当者レビュー

- <良かった点>
  - 「まちづくり」という不透明なものに対して、プロジェクトを達成させるためには何が必要なのか、というのに気づかされた面もあった。
- <悪かった点>
  - マチトソラと事務局側との事前打合せが足りなかったと思う。責任の配分や学生にどこまで担ってもらうかなど、しっかりすり合わせを行うべきであった。

## (6) 有限会社櫻山農園

### ● 事業概要

経営理念【櫻山農業で世界を幸せにする】を根拠に、農産物の生産を通して地域社会に必要とされる会社に成長していく事を目指している。

具体的には、地域の耕作放棄地を借り受け、トマト、米、麦、大豆、小松菜、しいたけの生産・販売を行っている。その原料を元に一部加工品をOEMで製造し販売している。地域農業の担い手でありながらマーケットは幅広く、全国・世界に向けて展開している。

### ● Long term internshipプロジェクト内容

プロジェクト名称	あぐりビジネス ももりこプロジェクト
プロジェクト概要	<p>企業理念を反映したホームページのグランドデザインを行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・HPにどんな要素を盛り込むかを検討（コンテンツの洗い出し）</li> <li>・農園の取材、職員へのインタビュー等を実施（HPに反映）</li> <li>・ページの作りこみ（イラストレーターなどを使用）</li> </ul>
プロジェクト組成の背景・目的	<p>事業の拡大や6次化の確立に向けて製造及び販売部門の体制の見直しが急務となっている。農家としては扱っている品目が4種類と多く、現在は社長や専務が現場にいないと組織がまわらない、すなわち権限移譲ができていない状態である。経営陣が経營業務ができていないことで組織の体をなしていないのが現状であり、今後も事業の拡大傾向が加速していく見込みである以上、会社としての組織を作る事が急務である。</p> <p>今回のインターンシップでは、組織化する上で必要になるセクション（部署）の1つである「営業」のIT/HP部門の新設に向けて、インターン生にHPのグランドデザインを考えてもらいたい。</p> <p>また、組織化していく上では、企業理念の浸透と共有が不可欠である。櫻山農園の理念を反映したHPを会社の旗印とし、社員教育のツールとしても利用できるようにしたい。</p>

### ● 活動スケジュール

8月	櫻山農園の企業理念を理解するためのヒアリングおよびHP掲載コンテンツの洗い出し
9月	ヒアリングを元にHPのベース案を5案作成し櫻山専務にプレゼンテーション
10月～1月	HPのグランドデザイン作成・完成

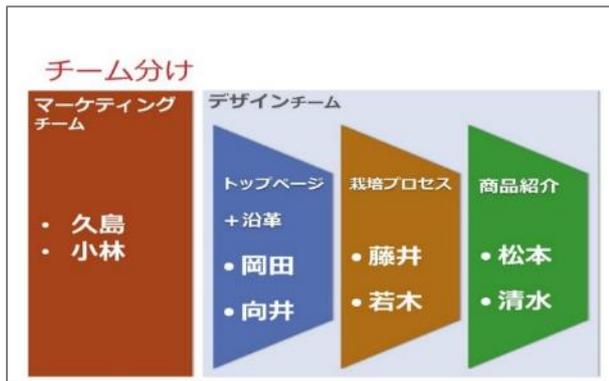
### ● メンバー

氏名	学部	学年	備考
藤井悠司	工学部	3年生	デザインチームリーダー
向井麻美	工学部	3年生	補佐
松本拓真	工学部	3年生	
岡田佳奈	工学部	3年生	
清水佑真	工学部	3年生	
若木宏樹	工学部	3年生	
久島春香	総合科学部	2年生	マーケティングチームリーダー
小林楓	総合科学部	1年生	

● **取り組み内容**

榎山農園のプロジェクトには今年度最多の8名のインターン生が参加し、マーケティングを行うチーム（マーケティングチーム：総合科学部生）と実際にHPのデザインにおこしていくチーム（デザインチーム：工学部学生）に分けて作業を進めた。また、デザインチームの中でも担当するページごとに小チームを形成した。榎山農園の農場・設備見学や専務をはじめとする従業員へのヒアリング・HPの素材写真の撮影などを行い、HP案を作成した。

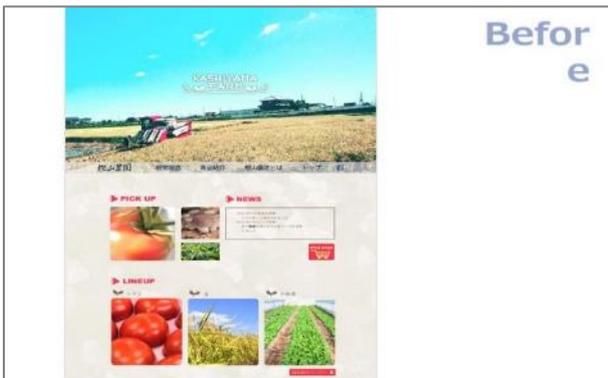
12月時点で完成したHP案を第三者に見てもらったところ、経営理念を反映させることに囚われすぎたが故に「経営理念を全面に押しすぎ、消費者を意識したデザインではなくなっている」や、チーム制を進めたが故に「別のページと内容が重複している部分があり分かりにくい」、などの指摘があったため、一旦構成を白紙に戻し、いちからHPデザインを検討し直し、1月に完成版が完成した。



■ インターン生チーム分け



■ HPデザイン案（修正前一部抜粋）



■ HP案の構成し直し一部抜粋（before）



■ HP案の構成し直し一部抜粋（after）

● **インターン生コメント**

・HP作成の専門家がないため、これで正しいのかと手探り状態で進めたこと、人数が多く仕事を適正に割り振れなかったことで、次第にメンバー内で仕事量やモチベーション、打合せでの発言量に差が出始めてしまった。そこからチーム全体のコミュニケーションが不足し、メンバー内で不信感が生まれてしまった時期もあった。

モチベーションに差が在ると感じたとき、「自分はやるべきことをやっている」、「自分がやらなくても誰かがやってくれる」といった『自分のこと』を考えるのではなく、目標達成のために『チーム全体として何ができるか』を考えていくことが大事であると学んだ。

・榎山専務から言われた、「自分が変われば環境が変わる」という言葉が印象に残っている。

モチベーションの差を認識したときに、もっと自分をよくする行動をとって周りを変えていくべきだった、と感じた。これは榎山専務の言っていたことをまさに体言したもので、『自分』というものを試されていた瞬間だと思う。

社会に出た時に同じような境遇になったとき、この言葉と今回の経験を思い出し、指針としていきたいと思う。

● 最終報告会の様子



■プロジェクト報告の様子



(有)榎山農園プロジェクト報告



■榎山農園 受入担当 榎山氏

受け入れ担当者レビュー

- 徳島大学というのは今まですごく遠い存在だった。それが今回このような機会を得られて、素晴らしい学生との出会いがあったのは本当に嬉しかった。
- 1番の反省点は、インターン生の人数が多いということの大変さを認識していなかったこと。(榎山農園様は受入企業中最多の8名受入)
- 農業という職の性質的なものもあり、QLIPさんのようにガントチャートでスケジュールをしっかりと管理するということもできておらず、その場しのぎの対応になってしまったことが反省点。
- 組織化を図るにあたっては、社員とも理念の共有が必要になるが、インターンシップを進める中で学生に企業理念を伝える機会があり、本当の意味で「理念を共有する」ということの難しさも痛感した。
- だがその一方で、関わり続けていくことで必ず伝わるといことも気づかされた。
- 社内への効果としては、作成途中のHPなどを起点に社員の意識が高まったことが挙げられる。社員から「専務が自由に飛べるように僕は現場をしっかり責任もってまわします！」というような声も聞こえた。
- 来年はそう言ってくれた社員をインターンに関わらせようかと考えている。

## (7) 大塚テクノ株式会社

### ● 事業概要

汎用プラスチックからスーパーエンジニアリングプラスチックまであらゆる樹脂を「高い技術力」「クリーンな環境」「優れた品質」のもと、成形・加工を行っている。

【医療製品】 医薬品をはじめ、人体への影響が考慮される安全性の高いプラスチック製品を製造。

【精密製品】 フープ成形技術を用い金属とプラスチックの複合部材の製造。

【サーマルプロテクター】 リチウムイオン電池向け安全装置を生産。

### ● Long term internship プロジェクト内容

プロジェクト名称	テクノな未来を考える
プロジェクト概要	経営戦略に基づいた人材確保のためのツールを作成する。 具体的には、①2018年度採用に向けたパンフレットの作成、②就職・企業説明会で使用するスライドの作成、の2点を成果物として活動してもらう。 ☆進めていくための手段・手法☆ 社内インタビュー、業界リサーチ、内定者インタビューなどを行い、仮説を立て社内の承認後、成果物の作成を行う。
プロジェクト組成の背景・目的	国内景気が回復基調で推移した昨今では、企業の新卒採用が大幅に増えてきている。その中で中小企業にとって生命線でもある人材確保が、大企業の大量採用の影響を受け、年々厳しい状況になりつつある。 大塚テクノにおいても、10年、20年後を見通した際に必要となる人材像は明確に描けているものの、求める人材の採用は厳しい状況である。 今回のインターンシップでは、学生の目線から、就活生が企業選択の際にどのような情報を求めているのか、どのようなアプローチをすれば求める人材に効果的に情報が伝わるのかを考察し、成果物をあげてもらいたい。

### ● 活動スケジュール

9月6日	インターンシップ開始、入社式を行う
9月中	パンフレット/スライドの構成・デザイン検討、社員インタビュー等を実施
10月3日	内定者インタビューを実施、パンフレット/スライドの構成・デザインの確定
10月18日	役員前成果報告会を実施

### ● メンバー

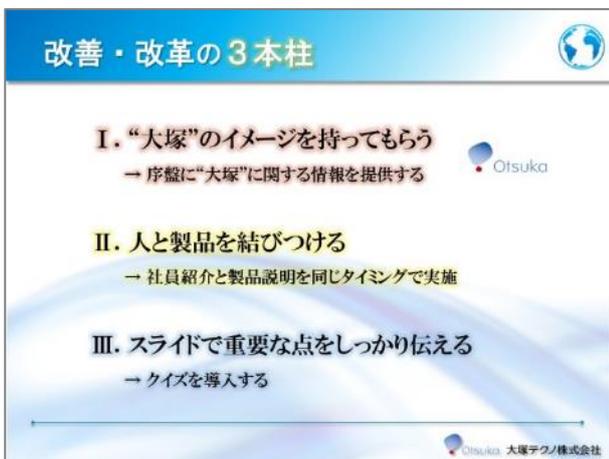
氏名	学部	学年	備考
納多里奈	総合科学部	3年生	リーダー
青山晃奈	総合科学部	3年生	補佐
谷和紀	総合科学部	3年生	
吉川直弥	工学部	3年生	

● **取り組み内容**

他社の企業紹介パンフレットを取り寄せ、それぞれからパンフレットづくりに活かせる点・改良点などの洗い出しを行った。大塚テクノの既存のパンフレットおよびスライドを分析し、改善・改革の3本柱（下図）を掲げ、コンテンツの洗い出しやデザインの構成作業を行った。就活生が求める情報とは何かを学生目線で考えた結果、「その企業が持つ優れた技術や製品情報についての知識を得られるかどうか」ではなく、「自分がその企業で働く際のイメージを持てるかどうか」であるとの観点から、製品紹介に多く割かれていた構成を大きくかえ、そこで働く「人」の生の声や1日のスケジュール、余暇の過ごし方などに焦点を当て、製品情報もその「人」と関連付けて紹介するよう工夫した。

働く人の声を掲載するにあたっては社内各部署でのインタビューや写真撮影を行い、完成したパンフレット案の印刷にあたっては、業者の選定・コスト計算までを行った。

完成したスライド案とパンフレット案を提出し、役員前成果報告会を実施した。



■ パンフレット・スライド 改善改革の3本柱



■ 受入先での打合せの様子



■ 既存のパンフレット（一部抜粋）



■ インターン生が作成したパンフレット（一部抜粋）

## ● インターン生コメント

・スライドの案を提出した時に、「学生独自のアイデアが反映されていない」、「改善はされているが根本的・革新的な改革はできていない」とやり直しを指示された時は、悔しさや「このままではプロジェクトが成功しない」という追いつめられた気持ちになった。そこで1日リフレッシュ期間をおき、メンバー各々が今後どうするかを考えてくるようにした結果、意地でも認められるスライドを作ってやる、という風に気持ちに変化が生じた。

・個々人にタスクを持たせ、責任感を持たせて仕事を行ったので、スムーズに作業が進んだ。具体的には、①全員で方針を考える、②次のミーティングまでに必要なタスクを洗い出し分担する、③各自作業を行ってくる、④ミーティングの場で全員でアイデアを共有・改善する、という流れである。全員で集まれる貴重なミーティングの場をいかに有意義なものにできるかが大事だったと思う。

## ● 最終報告会の様子



■プロジェクト報告の様子



大塚テクノ(株)プロジェクト報告



### 受け入れ担当者レビュー

- ・単なるインターンでは業務の負担になり、当初は受入を断ろうと思っていた。が、学生を「お客様」ではなく「課題解決の戦力」として扱ってほしいとの事務局からの話があり、受入に踏み切った。
- ・学生から出てきた「学生目線」の成果物には、今まで我々が自己満足的に採用活動をしていたんだと気づかされた。
- ・インターンで実施した社員インタビューで「仕事のやりがい」などを聞かれることによって、社員が初心に立ち返り、改めて仕事への取り組み姿勢を考える機会となった。
- ・インターン生のフレッシュさ、熱さを見て、入社当時の想いを思い出す社員もいた。
- ・限られた期間の中でプロジェクトリーダーとしてゴールまでたどりつかないといけない、という経験をして、受入担当者である若手社員の成長になった。

## (8) 会場の様子



■プロジェクト報告中の会場の様子



■プロジェクト報告中の会場の様子

## 4. 講評

徳島大学COCプラス推進本部推進監の山中英生教授より、本報告会の講評をいただきました。

今回の発表では、反省点や至らなかった点などの報告も多かったですが、それは受入先の企業様方が当方の主旨をよくご理解いただき、真摯に、「社員として」学生と向き合っていたからこそ出てきたコメントだと思っております。

スケジュール管理、メンバー間でのコミュニケーション、情報共有の仕方、タスクの管理など、社会に出れば当たり前にあるものですが、インターンに参加した学生は皆、この「社会では当たりの壁」にぶつかりました。

学生である今の段階で彼らが経験できたのは、受入企業様方が、「学生」でも「お客様」でもなく、いち「社会人」として、「社員」として学生を受け入れてくださったからこそだと思っております。企業の方がかなり真剣に取り組んで頂いたからこそできた、生身の経験だと思います。本当に感謝申し上げます。

また、それぞれの事業には必ずお客様（顧客）がいます。何のために、誰のためにその事業を行っているのか、学生の発表を聞きながら、皆そこをしっかりと見出しているということに関心いたしました。顧客に対する価値をどのように創り出すのかということをしっかり考えることができていました。この部分が普通の授業では伝わらないところなのです。どうしても、「こういう製品があればよいのではないか」、「こうすればよいのではないか」と概念的に考えてしまいます。本当の顧客は誰か、どんなことを求めているのか、そこをしっかりと考えられていた、というのが重要だったと思います。

小さなイノベーション、小さな改善、小さな改革、それらの積み重ねが大きなものにつながっていくのだと思います。

今回インターンシップを受け入れてくださった企業・団体様は、徳島で強みを持って事業を営んでおられたり、徳島の課題に積極的に取り組んでおられたりと、非常に魅力的な企業や団体様でした。そのような企業・団体様とつながれたことは、学生のみなさんにとって必ず将来武器になります。そのことをしっかりと認識して、将来のビジョンを描いていってください。



■ 講評 山中英生教授

## 5. 閉会挨拶

徳島大学理事（教育担当）・副学長の高石喜久理事より、閉会の挨拶をいただきました。

高石理事からは、インターンシップに取り組んだ学生らに対し、「学生にとって大学ではなく現場で学ぶ、仕事をするという経験は非常に重要なことであり、学生の皆さんはおおいに悩み、泣いたことでしょう。その分多くを学び、大きく成長したと思います」とのメッセージを頂きました。

また、今回インターンシップを受け入れてくださった企業・団体様に対しては、「大学側も受入側も双方が win-win になるようなしくみを作っていきたいと思っています。インターンシップを進めていくにあたっては、誰のためにやるのか、何のためにやるのか、それが大事だと思います。若者を社会全体で育てるという意味でも、これから日本を背負っていく若者の教育にお力添えいただきたいと思います。本日は誠にありがとうございました。」と感謝の意を述べさせていただきました。



■ 閉会挨拶 高石喜久理事

## 10-1. 講評シート①企業

### 講 評 （ 企 業 ）

氏名： \_\_\_\_\_ 所属： \_\_\_\_\_ 役職： \_\_\_\_\_

Mail: \_\_\_\_\_ Tel: \_\_\_\_\_

①『実践力養成型インターンシップ最終報告会』全体を通してのご意見・ご感想をご記入ください。

②『実践力養成型インターンシップ』受け入れに対して、ご興味はございますか。

興味がありすでに受け入れを検討してみたい 興味はある 興味はない

その他 ( \_\_\_\_\_ )

③ 後日、インターンシップの受け入れを検討していらっしゃる企業の方を対象に、『実践力養成型インターンシップ事業説明会』を開催する予定でございます。(2月下旬頃)  
社内で解決すべき課題・テーマ・ミッション等、お持ち込みいただけるものがございましたら、ぜひお持ちの上、事業説明会にご参加ください。  
なお、開催日等のご連絡は追って差し上げます。

実践力養成型インターンシップ事業説明会についての情報を 希望する ・ 希望しない

※ご記入ありがとうございました。こちらのシートは会場出口にて回収させていただきます。  
頂きましたご意見・ご感想をもとに、次年度以降のインターンシップの質の向上に努めさせていただきます。

## 10-1. 講評シート②大学関係者

### 講 評 （ 大学関係者 ）

氏名： \_\_\_\_\_ 所属： \_\_\_\_\_ 役職： \_\_\_\_\_

Mail: \_\_\_\_\_ Tel: \_\_\_\_\_

①『実践力養成型インターンシップ最終報告会』全体を通してのご意見・ご感想をご記入ください。

②次年度の『実践力養成型インターンシップ』に向けて、お気づきになられた改善点等をご記入ください。

③この『実践力養成型インターンシップ』を施行することは、本学にとって、どのような効果があると思われますか？

※ご記入ありがとうございました。こちらのシートは会場出口にて回収させていただきます。  
頂きましたご意見・ご感想をもとに、次年度以降のインターンシップの質の向上に努めさせていただきます。

## 10-2. 講評シート回答

### ①ご意見・ご感想について（自由記述欄より）

#### ●学生の取り組み姿勢・成長に関するご意見・ご感想

- ・ 学生の成長という点ではどのPJも有効であったと思う。（企業）
- ・ 長い社会人生活で一番ありがちな挫折や目標を見失ったりすることを全員で体験したと思われる上勝学舎のようなPJをもっと増やしてもいいように思う。（しっかりとフォローする必要があるが）（企業）
- ・ 学生の取り組む姿勢を見ることができた。（企業）
- ・ 学生さんのうちにいろいろ体験できてこういう体験こそ必要だと思いました。（企業）
- ・ 学生の皆さんの躍力する姿に刺激をいただきました。（企業）
- ・ 必ずしも結果を優先するというのではなく、企業の既存社員では発想できないような視点を持った学生の取り組みが理想的と思われます。（企業）
- ・ チームワーク、グループワークの経験が少ない中、思いの外内容の濃いプレゼン及びPJ結果（成果）になっているように思います。学生の皆さんは自らのインターンシップを誇りに思っておりよいと考えます。（大学関係者）
- ・ 学生は授業が有り、経済的理由から学費も自分のアルバイトから出しているという環境の中、多くの時間を使ってインターンシップをよくここまで追えることができたなと思います。（大学関係者）
- ・ この発表の目的が後輩に向けて反省点や失敗点を発表することであるとあなたが述べていましたが、素直に反省点を発表している点は好感が持てました。（大学関係者）
- ・ 積極的な学生が意外に多いことにも感心した。（大学関係者）

#### ●実践力養成型インターンシップの主旨・狙いに関するご意見・ご感想

- ・ 従来のただ「仕事を体験する」だけのインターンシップとは違い、実践力養成型インターンシップということで、新鮮な気持ちで楽しく聴かせていただきました。（企業）
- ・ 課題を与え、それを解決していく問題解決力のある人材を徳島に！という目的でこのインターンシップが実施されていると知り、仕事をしていく上で本当に必要なのはその力であると改めて感じました。（企業）
- ・ 長期間ということで、企業負担が大きいイメージでしたが、学生の持ち味と企業の困りごとをマッチングさせ、目的を共有することができれば、お互いにとって大きなメリットになるのだと感じました。（企業）
- ・ 「戦力」という言葉が出ましたが、それなら企業としても受入を検討しやすいかと感じました。（企業）
- ・ 数ヶ月という長期といえども短期間の中で成果や貴重な体験が生まれています。企業や団体のスタッフの支援もあると思いますが、非常に成功している取り組みと感心しました。（大学関係者）
- ・ 学生が甘やかされずに扱われたことは大変良いことでした。（大学関係者）
- ・ お客様扱いしないという方針が良かったと感じました。受け入れ先の社員教育にもなっているかと感じました。（大学関係者）
- ・ ミッションがあることにより、インターンシップの目的がぶれないのだと思いました。（大学関係者）
- ・ 長期間のメリットを活かし、軌道修正を加えて学生の気付きなどでできていたことは内容以上の成果が得られたのではないかと考える。（大学関係者）

### ●実践力養成型インターンシップの進め方に関するご意見・ご感想

- ・ インターンシップに取り組む中で振り返りをどのように行うかが大切でかつ難しい問題であると感じた。（大学関係者）
- ・ 学生へのマネジメントをどこまでやるかは難しい課題であると感じた。（大学関係者）
- ・ 初年度のため試行錯誤に苦労された点多々あったようだが、いずれのチームの報告も正直にそれを見つめ、反省の中に成長を感じさせる印象深いものだった。半年足らずという短い期間にできることの限界があったと思うが、この経験をぜひ次年度以降の取り組みにつなげて欲しいと思う。（大学関係者）
- ・ 学生の実施結果、企業側の実施結果に対する PDCA が確立され、自企業へも応用できることを明確化していたこと。結集として双方が win-win と感じられた。（大学関係者）

### ●インターンシップ開始前の準備段階に対するご意見・ご感想

- ・ 多くの報告においては、学生だから未熟であったという部分が反省点として挙げられていましたが、準備段階での企業及びメンバー間でのレベルと方向性合わせが不足していたように感じられました。（企業）
- ・ インターン生の皆さんの仰っていた失敗点の中で「情報共有不足」、「インターン生としての自覚のなさ」が挙げられていましたが、受け入れ企業としても受け入れを行う以上何か得るものがあると思ってインターンを完了させたいはず…インターン生の皆さんが自覚と責任を持って参加できるように PJ としてもサポートを厚くされては…という感想です。（企業）

### ●報告会のスタイルに関するご意見・ご感想

- ・ 学生さんのスライドを使ったプレゼンは、もっと基本的な作法を尊重した方がよいと思います。（大学関係者）
- ・ 座席指定は誰のための報告会かを意識された結果でしょうか？よいとは思いません。（大学関係者）
- ・ 報告会ではタイムテーブルを重視、質問者数は制限すべきです。（大学関係者）
- ・ インターンに取り組む学生のモチベーションについて報告（分析）されていたのが大変参考になった。（大学関係者）
- ・ 報告の方では、課題を達成できたか否かと合わせて、自分たちのモチベーションを客観的に分析し、モチベーション維持の方法についても触れていたのが興味深かったです。（企業）
- ・ 課題解決に対する解答が出せたのかどうかははっきりしなかったものもあったので知りたかった。（当初の目標に対してどこまで達成できたのかを知りたかった）（大学関係者）

### ●プロジェクトの内容に関するご意見・ご感想

- ・ 企業に関わる以上はある程度の成果物をのこす必要があると考える。（企業）
- ・ 企業によって、取り組み姿勢・内容に大きな差があると思います。（企業）
- ・ チームによって、ミッションの理解に差があるように感じ、改めて受け入れ側企業の苦労が見られました。（企業）
- ・ あまりハードルを上げるとインターンシップに参加する学生が集まりにくくなるので難しい問題とは思いますが。（企業）

## ●その他ご意見・ご感想

- ・ 学生の仕事に対するイメージを決める大切な取り組みなので、しっかり参考にさせていただき、当社のインターンシップに生かしていきます。（企業）
- ・ 発表を聴きながら、自社の若手と重なることもあり、学びになりました。（企業）
- ・ 企業が大学と、学生とどのように関わっていくべきなのかもっと話を聞きたかったので、企業側のスライドも見てみたい。（企業）
- ・ 創業期の企業での受け入れも興味があります。（企業）
- ・ 学生が大切にしている点、見落としがちなど参考にすることができた。（企業）
- ・ 学生側が求めていたこと、描いていたこと、またそのギャップなど学生さんのモチベーションを知り得ることができた好機となりました。（企業）
- ・ 企業さんの協力姿勢には驚きました。企業にとってもこの事業は目に見える利益以外のものが大きいのでしょうか。（大学関係者）

## ②次年度の実践力養成型インターンシップについての改善点（大学関係者自由記述欄より）

- ・ 学生は「授業」のイメージを持っているはずですので、主体的に自ら動くプロジェクトワークの意識を始めから持たせる仕組みが大切のように思います。
- ・ 学生はチーム（グループ）ワークの経験があまりありません。事前トレーニングが必要かもしれません。
- ・ 正課になるということでしたので、学習上の目的、到達目標との関係でどこまで出来たのかを知りたい。
- ・ 非常に難しい点ですが、各々の取り組みの定量的評価と合わせてすべての取り組みに対しての評価手法を検討する必要があるのではと感じます。
- ・ 教室や受け入れ先の学生へのサポート（マネジメント）をどこまでやるのかをはっきりさせ、またその結果を知りたい。
- ・ 受け入れ先との調整の難しさがあると思うが、理工系や医療系学生にふさわしいインターンシップの事例があればよいと思う。
- ・ 受け入れ側の企業の方々の協力と労力に見合うベネフィットの確保をしっかりと、参加学生にも意識させなければ継続できないおそれがあります。

## ③実践力養成型インターンシップを施行することの効果（大学関係者自由記述欄より）

- ・ 事前の受け入れ側との講習会の取り組みなど、今後のインターンシップのロールモデルになるものと思われます。
- ・ 学生にとっては就業体験を通じた社会勉強、大学と地元企業間では連携強化に役立つと思う。地域の活性化に役立つことを願っている。
- ・ グループワークの基本やコミュニケーションの大切さを理解している学生が増えるので、①卒業研究と修士論文のレベルが上昇する、②社会に出た後の評価があがる。
- ・ 社会人として不足している点を理解しているので、外の学生へその点を伝えてくれることで学生の全体的なレベルアップにつながります。
- ・ 学生が地域の企業を知ることができる。企業にとってはPRにもなっている。
- ・ 学生の成長に大きく貢献すると思います。地域の事業所、コミュニティの活性化に貢献することができると思います。